

「我が国の初等中等教育政策と大学入試」

東京国立博物館長
元文部科学事務次官
銭谷眞美

近年の我が国大学入試の変遷と現状

- 我が国では、昭和40年代受験競争の激化や、難問奇問の出題など大学入試が高校教育はじめ学校教育全般に重大な影響を及ぼした。このため、昭和54年大学入試センターが良質な問題を提供する共通テスト(共通一次試験)が導入され、この共通テストは平成2年に大学入試センター試験に切り替えられ、今日に至っている。
- 近年AO入試、推薦入試の実施規模が拡大するなど大学入試の多様化が進み、一方でこのことは入試における「学力不問」を招いているとの指摘もある。
- 大学全入時代の今日、大学入試の選択機能が低下し、①入試による大学入学者の学習水準の担保が困難、②大学入試の存在が進学希望高校生の学習意欲を喚起することが困難、③大学の人口管理と高等学校教育の質保障に悪影響、との指摘がなされている。

初等中等教育政策と大学入試をめぐる今後の課題

- 初等中等教育においては、近年「新しい学力観」に立った学力、「生きる力」、PI SA型学力などと呼ばれる知識のみならず思考力、判断力、応用力、意欲・関心・態度などを重視した政策がとられている。これらを大学入試においてどのように評価していくか。
- 大学入学者の学力をどのように担保していくか。「高大接続テスト(仮称)」などの研究や、AO入試、推薦入試の実質化が求められる。
- 実践的英語力の育成などグローバル人材育成のための大学入試の改善をどう進めるか。